通 引越しは日通
Tel: (11) 3583-3882

São Paulo-Shimbun
Mituto Mizumoto 1914 - 1991

TUNIBRA 1949 TRAVEL
Tel.: (11) 3346-8200
www.tunibra.com.br

São Paulo, sexta - feira, 30 de Agosto de 2013 - Nº 15.224 - ANO 67 saopauloshimbun.com R$ 3,30

Foi implantado na Beneficência Nipo-Brasileira de São Paulo Hospital São Miguel Arcanjo o SUS.

A cerimônia de inauguração ocorreu no dia 10 de agosto, às 11 horas, com a presença de 380 pessoas. Além das autoridades da área da saúde o Deputado Federal Junji Abe esteve presente juntamente com outras autoridades da comunidade japonesa.

O Deputado fez o discurso parabenizando o ocorrido e participou de desenlance de fita.

援協 ENKYO SUS病院が完成

「医療の拠点」に喜びの声

サンミゲル・アルカンジョで開所式

サンパウロ日伯援護協会（菊地義治会長）傘下で初となるSUS（統一医療保健システム）に対応した病院、「Beneficência Nipo-Brasileira de São Paulo Hospital São Miguel Arcanjo」が、サンパウロ（聖）州サンミゲル・アルカンジョ市内に完成し、開所式が10日午前11時から同病院で行われた。約380人が参加した開所式には一般、援協関係者をはじめ、多くの国会・聖州議員、医療関係者らが出席した。人口約3万人、聖市内から西方180キロの場所に位置する同市は、5年前から医療機関が同市運営の救急診療所しかなく、市民らは早期の病院建設を望んでいた。今回は市民の要望に応えた形での開所となり、参加した市民、近隣日系コロニア団体から祝福の声が聞かれた。

真新しい病院の外観

援協定款、第1章の第1条には「サンパウロ日伯援護協会は、利益を目的としない社会福祉法人であり、医療分野における社会、道徳、物的支援を、国籍、社会的地位、宗教、人種その他を問わず、必要となる人々に提供する事を目的とする」とある。病院を必要としていた同市でのSUS病院の建設は、援協の理念そのものだ。

8月12日、援協はブラジル厚生省公認の認定制度「ONA」査定機関から最高認定に当たる「最優秀」の認定を受け、現在では社会環境の変化と共に、日系社会にとどまらずブラジルでも指折りの医療福祉団体として位置付けられるまでに発展を遂げている。そうした中での同病院建設は今後、援協が公益福祉団体として事業を全うする姿勢でもある。

同病院の収容床は40床で、内・外科、婦人科、小児科の受診に対応。建坪は3191・45平方メートル。約1500万レアルの予算で、着工から1年3カ月で完成した。病院が同期間で完成することはまれらしく、出席したテレビ・バンデイランテスのコメンテーター、ミルトン・ネルス氏は、「この期間、この予算で完成できたのは日本人の病院だから」と称賛していた。

そのほか来賓には連邦下院議員の安部順一氏、日本オリンピオ・ジョセ氏、マルクス・ロドリゴ氏のほか、聖州議員の羽藤ジョージ氏、アマリ・ルシア・マリア氏、モラエス・ロドリゴ氏、セルソ・モシン前市長、ほか多数の医療関係者、メディアが出席し注目の高さがうかがえた。同市長の小田原ジョゼ氏は「市の誇りである歴史の一つになった」と開院を祝福。他の議員からもの援協をたたえる言葉が述べられていた。

事業の拡大を続ける援協だが、援協発展のために尽力した先駆者に敬意を表する姿勢は忘れておらず、病院前の通りを元会長の故・竹中正氏を顕彰し「竹中正通り（Rua Tadashi Takenaka）」と命名した。竹中氏は1975年～92年までの17年間にわたり会長を歴任した人物。その功績から82年にはサンパウロ名誉市民権、92年には勲3等瑞宝章を授章している。同市によって新しくアスファルト舗装された竹中通りの道路上では名前が刻まれたプレートの除幕式とテープカットが議員、関係者らによって執り行われた。

旗掲揚式

乾杯する援協関係者と来賓たち

開所式後、別会場で昼食会が行われ、参加した同病院から約20キロの場所に位置する同市のコロニア・ビニャール文化体育協会の貴田孝平会長は「受け付けにはビニャール出身者も居て身近に感じる。かつて援協は日本語しか分からない人が安心して利用できる病院としての存在だったが、それから2、3世と時代が変わり今も有り続けるのは信頼されている証しだと思う。この地に建設してくれたことに感謝したい」と感想を述べた。

また同婦人部会長の樋口節子さんは「今まで緊急の場合、イタペチニンガ、ソロカバまで行かなくてはならず、過去に搬送途中で亡くなった人もいると聞いている。病院は利用しないに越したことはないが病院が近くにあるとやっぱり安心」と述べ、同様に感謝の言葉が多く聞かれた。

同病院は今後、同市の医療の拠点となり市民の健康を支え、今から四半世紀前に開所した「日伯友好病院」と同様に、病院を中心とした街の発展に貢献するであろう。

営業は8月15日から既に始まっている。今後、医療機器の搬入や緊急搬送の設備も整えていく予定。また数年かけて増設する計画だ。

竹中通りのプレート除幕

竹中通り命名を記念しテープカット